

この六月十四日に第十回世界地方都市十字路会議が姫路市で開催されるという案内を受けた。今年のテーマが「歴史遺産を活かしたまちづくり」ということで、750年の歴史のある古い町並みを持つわが入来町の町づくりにも役立つ提言を得ることが出来るのではないかと一人で参加を申し込んだ。

この会議は国土交通省と開催地の県・市が主催し、開催地の町づくりに即したテーマを決めて、それに関連した魅力的な町づくりを行っている国内外の地方都市を招待し、地域の活性化を目指した意見交換などを行うのである。今年はエデ インバラ（英）シャンテ イイ（仏）水原（韓）ザルツブルグ（オーストリア）と白川村、日光市が招待され、事例発表やパネルディスカッションが行われる。

前夜の大雨で二十分近く遅れていた夜行列車「なは」は、夜が明けると姫路には定刻に着いて、会場の姫路キャッスルホテルにも迷うことなく九時に入ることが出来た。

十時開会。主催者側の挨拶の後の基調講演は、先頃の大震災からの再建にご活躍なさった貝原兵庫県知事で、その体験から、今後は膨脹する経済サイズではなく、人間サイズの環境に配慮し、自然や歴史遺産などの特徴を活かした個性ある町づくりをと提言された。スコットランドの民俗衣装チェックのスカートをはいたエデ インバラの開発部長さんの新旧市街の町並み保存の報告、パリ郊外の観光地シャンテ イイの少々髪の色がさびしくなった市長さんの、古城を背景にしたイベントによる観光客誘致のお話などがあった。

午後の特別講演は千宗室茶道裏千家家元で 鹿屋基地の特攻隊の僅かな生き残りの一人の由。死を覚悟した時東方に向かって「お母さん」と声を限りに叫んだとの話に、鹿児島とのゆかりを思い、何処か虚無的に見えるその眼差しを納得したことだった。

引き続き招待都市の事例発表となる。印象的だったのは、人口僅か六千人の白川村が、世界文化遺産に指定されたとたん年間百二十万人もの観光客が押しかけて来るようになった話。水原市の華城は十八世紀末に朝鮮王朝の建造したものだ、その作成の記録が克明に記され残っているため、朝鮮戦争で大きな破壊を被ったにも係わらず、完璧に復元出来たという話。ザルツブルグはインフラ整備に力を入れ、地下駐車場の完備や大きな会議場を作り、三十回もの見本市や経済サミットなどを催しているが、町の拡張範囲を見極めて、景観の保存可能な健全な都市の成長に努めているという話などであった。

白川村の現状はマスコミの報道に飛びつく日本人らしい。このままでは保存すべき村民の生活基盤が損なわれるのではと案じられた

どの都市も郷土に対する誇りと愛情に満ちていた。そして成功している外国の事例を参考にすることにより、今後は大切な郷土を賢く計画的に活性化する必要のあることを教えられた。充実した勉強が出来たと思っている。